

波斯教殘經と題して出版し、自分は當時手許に在つた不備の資料によつて摩尼經典たることを説明し、また佛蘭西のシャヴンヌ、ペリオ兩氏が *Un traité manichéen retrouvé en Chine* に於て周密な研究を發表したものと一部分に相應するウイグル文のものを發見したといふ話であつたし、最も氣の毒に感じ同情に堪えなかつたのは當時獨逸の國情から、出版の事が非常に困難で、異體の文字、例へば漢字とか亞刺比亞字とかの印刷の如きは一字の植字に一マルクを拂はねばならぬ有様で、氏の摩尼教關係の研究の如も、之が爲に出版が行き悩むで居る、出來れば自分も印刷工になりたい位だとの話であつた。自分は今春歸朝後、人から獨逸の學界の状態など聞かれる時この話をして、如何に學者の境遇の氣の毒であるかを傳へる一例にしたことも度々あつた。氏の寄せられた此の書を開いて見ると、曾て自分が最も面白く感じた文書の翻譯が、かゝる印刷の事業に於る困難を破つて立派に出版されて居る。喜悅と同情と感嘆とを一つにした涙ぐましい感慨に耽つたのに無理は無い。爾來一ヶ月餘、餘暇を得ることに自分は此の文字通りに金玉の書物に親しんだ。今こゝに其の紹介を思ひ立つたのは氏の寄贈の厚志に酬ゆると共に、出來得る限り之を廣く傳ふべき義務を擔つて居ることの自覺の爲に外ならぬ。只だ傳ふる處の至らずして、著者の意に背く無きかを恐れる。

此の書は一九一二年に出版された同名の書の第一卷、一九一九年の第二卷（本年十月發行の東洋學報第十二卷第三號に、石田學士によりて紹介を経たもの）に續いたもので、一九二二年普魯西學士院哲學歴史部學報中に收められたものである。内容はいふ迄もなく高昌即ち吐魯番地方から出たトルコ語の摩尼教に關係したものであるが、外に吐魯番の北方に當る *Bulayiq* から獲られた基督教經典の一斷片と、少しく性質を異にして然も極めて珍重すべ